

レージョ・エミリア自治体立の乳児保育所における
乳児の保育生活のはじまり
— 『ラウラの日記』における関係性から—

岡南愛梨*

The Beginning of the Child's Experience at Infant-Toddler Center
in Reggio Emilia:

From the Relationships in "Laura's Diary"

OKANAMI Airi

Abstract

This study aims to explore the beginning of infant-toddler's experiences in Early Childhood Education and Care. The author analyzes "*The Diary of Laura: Perspectives on a Reggio Emilia Diary*," which documented the child's experience at an Infant-Toddler Center in Reggio Emilia, Italy. After taking a look on the uniqueness of the diary, an examination was done for Laura's depicted relationships in each episode. Then, the role of family and teacher's interactions in Laura's adjustment process was examined through specific episodes. Lastly, the well-known "Watch's tick-tock" episode was reevaluated within the story of Laura's adjustment to the center. Consequently, the following insights emerged: Laura's diary captured interactions among people, materials, and space with text and photographs. Laura's adjustment to the center was intertwined with her life at home, in the close relationship with the family. The teachers subjectively engaged with Laura, attentive to her dialogues with materials. The watch's episode was recaptured to be an event embedded within Laura's relationships formed at the center. Thus, the beginning of infant-toddler's experience at the center signifies the commencement of learning within diverse relationships involving people, materials, and family.

Keywords : ECEC for Infant-toddlers, Relationship, Reggio Emilia, Diary, Documentation

1 はじめに

本研究では、イタリアのレージョ・エミリア自治体立（以下、レージョ）の乳児保育所での実践に関する文献を手がかりとして、乳児の保育生活のはじまりについて考察する。なお、本研究における「保育生活」とは、保育所などの保育施設で行われる子どもの集団生活のことを指す。

1.1 問題の所在

近年、待機児童問題が解消に向かうにつれ、乳児（0～2歳児）のうちから保育を利用する子どもが増えている。特に1・2歳児は、平成25年には33.9%だった保育所等利用率が令和4年には56.0%になり、ここ10年で大幅

キーワード：乳児の保育生活、関係性、レージョ・エミリア、日記、ドキュメンテーション

*令和2年度生 人間発達科学専攻

に上昇している（厚生労働省, 2022）。親の育児休業は最長で生後2歳まで取得可能である職場も多いため、特に0歳や1歳など早いうちから子どもを保育園に通わせることに関しては、悩みながらその選択を行なっている家庭も多く存在する。

親が社会に出るために保育が必要となるという文脈での乳児保育は、ケアの生産という側面に焦点が当てられている（Dahlberg, Moss & Pence, 2013/2022）。そこでは、子どもの健康的な発達のために、母親の代わりとなる保育者が子どもと親密な二者関係を築くことが期待される。乳児保育におけるケアの生産は、内で培った確実な愛着が外の世界を自律的に探索する基礎を作るという、主に西洋文化に適合した愛着理論をもとにしている（Singer, 1993）。これは、社会的活躍が期待されて子どもの世話ができない母親の代わりに、母子関係をモデルとしたケアを保育施設が提供するという支配的な言説を生成した。このように家庭の代替として提供される保育は、特にイギリスやアメリカにおいて、チャイルドケアと呼ばれる保育サービスのビジネスとして広まった。市場ビジネスに参入した保育サービスにおける顧客は、それを選択する親であり、実際に保育を受ける子どもではない（Moss, 2019a）。新自由主義の流れの中で、保育は、子どもの権利ではなく、サービスとしてみます商品化されていく危機にある（浅井, 2020）。

日本の乳児保育は、就労等の事由から必要性を高く認定された家族から優先的に利用できるものであり、また、3歳以上児の保育が無償であるのに対して有償である。そのため、日中子どもの世話をする人がいない家庭のために家族代わりのケアを行う保育サービスという側面が、3歳以上児よりも強く認識されている現状がある。働いている親にとっての乳児保育は、仕事をしている間子どもを預かってくれ、家族の代わりに保育を行なってくれる場所であるが、そこでの子どもの保育生活は、家とは異なる状況下で営まれる保育者や年の近い他の子どもたちとの共生である。子どもにとって、幼いうちからそのような家庭とは異なる性質の環境での生活をはじめめることはどういった経験なのだろうか。

Dahlberg et al. (2013/2022)は、家族代わりのケアの生産やビジネスとしての保育施設とは異なるオルタナティブな言説として、市民社会に位置づく参加と対話の場としての保育施設というあり方を提示している。民主的な実践へ参加する能動的な市民のための公的な場としての保育施設は、すべての子どもたちが多様なプロジェクトに参加する場所となる。こうしたオルタナティブな見方に立つと、乳児保育も、家族の代わりに愛情やケアを受ける場所ではなく、そこでしか出会えない関係性がある場所として考えられる。そして、乳児保育の役割について、親の就労を可能にするためのサービスという側面ではなく、そこで起こる教育の営みなどの側面に着目して考えることができるようになる。保育者は親代わりのサービスの提供者ではないし、子ども自身もそのようなサービスの受け手ではなく、どちらも共に、保育施設における知識や文化の共同構築者として考えられる。Dahlberg et al.は、関係性の中で市民が育ち合う場として保育施設を考えてきた例として、レッジョの保育実践を挙げている。地域に根ざした文化的な教育であるレッジョの実践は、保育を政治的で倫理的な実践と考え、独特な語彙のもとその哲学を発展させてきた（Moss, 2019）。レッジョの実践は町の歴史の中で培われた民主主義のもと発展してきた実践であるため、そこで行われてきたことをそのまま別の文脈に複写することはできない（小玉, 2020）。しかし、家族の代わりにケアを生産する場所としての乳児保育という支配的な言説とは異なる視点から語られるレッジョの乳児保育実践から示唆を得ることは、日本における乳児の保育生活を捉え直すヒントとなる。

1.2 目的と方法

本研究では、レッジョの乳児保育実践の記録を分析し、そこに記された乳児の保育生活における関係性に着目する。対象の文献は、2009年にアメリカで出版された“*The diary of Laura: Perspectives on a Reggio Emilia Diary*”（『ラウラの日記：レッジョ・エミリアの日記への視点』、以下『ラウラの日記』）とする。これは、もともと1983年にイタリア語で出版された子どもの乳児保育所での生活を写真と文章で記録した「ラウラの日記」本編と、世界中からのその反響を収めた図書である¹。ラウラの日記は「援助（assistance）とケアのサービスとして一般的に考えられてきた乳児保育所という機関で、それまで誰も関心を持たなかった本当の子どもを見つけようと努力したものだ」（Campani, Cavazzoni, Forghieri & Bini, p.62, 斜体は原文通り）と当時の保育者が振り返って語っているように、これは、それまで家庭で保育されることが一般的だった乳児の乳児保育所での生活について探究した記録である。本研究の目的は、レッジョの乳児保育実践において子どもの保育生活の実際を

捉えようとした記録を収録した『ラウラの日記』を分析することで、乳児にとっての保育生活のはじまりについて検討することである。

「ラウラの日記」本編の内容の分析に加えて、探究の痕跡を多角的に捉えるため、日記の反響を受けて各国（アメリカ・スコットランド・オーストラリア・韓国・スウェーデン）の研究者が執筆したりフレクション、そして、日記の制作にも携わったCarla Rinaldiによる論考などを適宜参考にすることとする。なお、「乳児保育」が慣習的に0～2歳児保育を指して使われてきたように、日本の保育における「乳児」は児童福祉法や母子健康法などから想定される0歳11ヶ月終日までではなく、1歳児と2歳児も含めた3歳未満児を指して用いられることが多い。したがって本論文では、0歳から1歳未満を指すInfantとおよそ1歳から3歳未満を指すToddlerを合わせたInfant-toddlerを「乳児」と訳し、0～2歳児を対象とした保育施設Asilo Nido（「安全な巣」という意味で、英訳はInfant-Toddler Center）を「乳児保育所」と訳して使用する。また、レッジョの実践は、特にその教育的側面への注目から「幼児教育実践」もしくは「乳幼児教育実践」と記されることも多いが、本研究では「保育」という言葉に「養護」と合わせて「教育」の意味も含まれることを鑑みて、「保育実践」、または0～2歳児の保育実践のみを指して「乳児保育実践」と記す。同じ理由で、Teacherに関しても「教師」ではなく一律「保育者」と訳す。

2 先行研究

2.1 レッジョの保育実践の広まりと特徴

イタリアの北部エミリア・ロマーニャ州に位置するレッジョ・エミリア市における自治体立の保育実践は、インパクトのある子どもの作品や子どもの学びを可視化するドキュメンテーションなどの記録により世界中の人々を魅了し続けている。ファシスト政権の抑圧を受けた経験から、戦後に自分たちの町の教育を自分たちの手で作ろうとする小さな町の実践として始まったレッジョの保育実践は、イタリア本土に認識されるよりも先に、「子どもたちの100の言葉展」がアメリカの教師や研究者の関心を呼び、1991年に幼児期の優れた教育実践として『ニューズウィーク』誌に取り上げられた（Reggio Children, 2012）。その後、レッジョの子どもたちと教師の実践に関する展覧会が世界各国で開催されていくとともに教育関係者の関心を集め、瞬く間に世界的に有名な保育実践となった。

日本においても2001年に東京のワタリウム美術館で「子どもたちの100の言葉展」が開催され、レッジョの保育実践とその教育哲学に関する図書が発刊されていく中で、保育関係者や教育関係者を中心に知れ渡るようになった。当初、日本では主にアメリカでの議論を通してレッジョが紹介されたため、「創造性の教育」や「アートの教育」として広まった（佐藤, 2020）。その中では、アトリエの存在やアートの活動への着目から、子どもの想像力や表現能力を伸ばすことに特化した教育であるかのように勘違いされたこともある。しかし、レッジョにおける「アート」とはより広い概念であり、世界の美しさの主体的な探索と敬愛であり、他者と連帯し、よりよい生活を探究する表現すべてのことを指す（森, 2020）。そこでは、一人ひとりのあらゆる表現による言葉がよく聴かれ、尊重される。レッジョの実践における思想や哲学の中心的人物であるLoris Malaguzziの有名な詩「子どもたちの100のことば」に表現されているように、子どもは、大人が計りきることができない豊かな可能性を持つ存在として考えられる。その哲学の根底には、すべての子どもを有能で権利を有する存在として尊重する姿勢がある（Smith, 1998）。

一人ひとりを権利主体として尊重する視点とともに、レッジョの教育哲学の中核をなすのが、関係性を基礎とした教育である。レッジョの保育実践では、小集団で生じるあらゆる関係性による学びを重視する。Malaguzzi (1993)は、その関係性とは暖かく子どもたちを守る毛布のようなものではなく、共通の目的に向かってダイナミックに相互作用する要素の集まりそのものであると語る。レッジョの保育者は子ども同士での意見の交換などの対話を重視し、そこに至る思考過程に着目する（上村, 2018）。レッジョで30年以上アトリエリスタとして勤務したVecchi (2010)は、子どもたちの関係性によって、あらゆる形で表現されたことばが相乗効果を生み出し、学びが生成されていくことを説明する。レッジョの保育実践において、関係性は保育の背景なのではなく、学びが起こる中心的なシステムである。そこで生成される知識は、階段のように積み重なるのではなく、始まりも終わ

りもないスパゲッティの絡まりのように、常に「あいだ」に存在し、あちこちへ進む可能性に開かれたものである (Moss, 2019b)。

草創期からマラグッツィと共にレッジョの教育をつくってきたRinaldi (2006/2019) は、乳児保育がケアや福祉の一環に留まりその教育的側面が蔑ろにされがちなことを指摘した上で、3歳以上の教育との間に一線を引くのではなく、同じ哲学のもと連続したものとして考える必要性を説いている。レッジョの保育実践や哲学から乳児保育に着目した研究には、保育者と子どものエピソードについて検討したものがあがるが (大塚・桑田, 2020)、集団で行われる保育生活という場のより広い関係性に着目したものはない。そこで本研究では、レッジョの乳児保育所に新しくやってきた乳児の最初の2ヶ月間を記録した『ラウラの日記』における関係性に着目し、その保育生活を検討する。

2.2 レッジョにおける乳児保育の歴史

レッジョでは、1970年代初頭に0～2歳児を対象とした乳児保育所の資金調達と建設の計画に関する法案が採択される数年前から、幼い子どもたちのための保育施設の意味や役割について議論を開始していた (Reggio Children, 2012)。国法第1044号にて乳児保育所の設立は定められ、国が資金を提供し、運営は各コミュンが行うこととなった。レッジョでは1971年に最初の乳児保育所Genoeffa Cerviが設立され、その後1979年までに11の乳児保育所ができた。乳児保育所の責任を保健省 (Ministry of Health) に置いたイタリア政府と異なり、レッジョのコミュンでは初めから乳児保育所を学校と社会サービスに関する評議員 (Assessore)²の管轄とし、0歳から6歳までの教育の一部として乳児保育所を位置付けた。1972年に採択されたレッジョの「自治体立幼児学校の指針 (Regolamento delle scuole comunali dell'infanzia)」には、乳児保育所と3歳以上児が通う幼児学校 (Scuola dell'infanzia) の両方に共通の原則が定められた。乳児保育所の運営には、教師だけでなく、保護者や子どもたち、そして地域コミュニティ全体が参加することが強く意識されていた (Cagliari, Castagnetti, Giudici, Rinaldi, Vecchi & Moss, 2016)。

レッジョがいち早く乳児保育を教育の一部として開始した一方で、イタリア全土を見ると、乳児保育所の設立は当初の計画通りには進んでいなかった。1981年時点でレッジョを含むエミリア・ロマーニャ州では338人の子どもに対して乳児保育所が1つあったのに対し、南イタリアでは6,248人の子どもに対して乳児保育所が1つと、地域による格差が大きくなっていった (Reggio Children, 2012)。そこで、Malaguzziは「乳児保育所と乳幼児の全国連盟 (Gruppo Nazionale Nidi e Infanzia)」³を1980年にレッジョに設立し、1994年までその会長を務めた。この全国連盟は、イタリア全土の様々な地域での乳児保育の実践や経験の交流やその促進のためのネットワークを確立することを目的としたものだった (Reggio Children, 2012)。全国連盟が開催した会議には、「乳児保育所が福祉サービス中心になってしまうことを防ぐために、そして日々の教育的活動を強化するために、より深い文化的、社会的、政治的で教育的な分析を求めて、乳児保育所で働く人々が多数参加していた」 (Cagliari et al., 2016, p.289)。このようにイタリアにおける乳児保育所の設置とその意義や、乳児保育における教育の議論を積極的に先導していたレッジョにおいて、1983年にイタリア語で出版されたのが、乳児保育所での保育の実際を写真と文章で記録した「ラウラの日記」(『子どもたちの物語を書き留める乳児保育所の日記：ラウラの物語』“*Il diario al nido per fermare la storia dei bambini: Storia di Laura*”)である。

2.3 「ラウラの日記」と有名な「腕時計のチクタク」

Edwards (2009a)によると、1983年にイタリアで出版された「ラウラの日記」は、レッジョ・エミリアの教育者たちの経験における道しるべとなってきたものである。0歳からの子どもを対象とするように公立の保育システムが拡大した当時、乳児保育所は様々な問いとともに実践が行われていた。「幼い子どもたちは乳児保育所に適応 (adjust)⁴できるのか？その適応は、子どもたちや親との関係にどのような影響を与えるのだろうか？親と保育者はどのように赤ちゃんを“共有”できるのか？」(Edwards, 2009a, p.2) そのような問いとともに、Rinaldiはアルコバレノ乳児保育所の保育者と研究を実施し、それは乳児の保育について一般に向けて語った「レッジョのノート (Quaderni Reggiani)」という文書の一部として発行された。

のちに本として出版された「ラウラの日記」は、ラウラという子どもがアルコバレノ乳児保育所で経験した

日々を保育者が記録した「日記」の一部であり、ラウラの最初の2ヶ月間を紹介している。元となったこの「日記」とは、乳児保育所に通うすべての子ども一人ひとりに用意されたものである。これは、保育者にとっては観察ツールであり、家族にとっては子どもがどのように乳児保育所での生活を送っているのかを示した記録であり、子どもにとっては乳児保育所での経験を後に再構築するためのものであることが、「ラウラの日記」の冒頭に記載されている。

初版から20年以上の時間が経ち、2009年に出版された英語版の『ラウラの日記』では、イタリア語で書かれた「ラウラの日記」本編の現物の写しの横に英語訳が付け加えられ、さらに、上述したように、世界各国の研究者によるリフレクションが収録されている。

「ラウラの日記」の内容については、「腕時計のチクタク」というエピソードに用いられた写真が世界的によく知られている。これは、ラウラがカタログ本に載った腕時計の写真を見ている時に、保育者が腕にしていた腕時計をラウラに聴かせると、ラウラが腕時計の写真にも耳を近づけてその音を聴こうとする、という場面を示した6枚の写真である。「ラウラと腕時計という一連の写真は、イタリアのみならず世界中で我々の教育哲学を象徴するようになった」(Campani et al., p.58)とアルコバレーノ乳児保育所の保育者らが語っているように、ラウラと腕時計の写真はレッジョの保育実践について各所で紹介される際によく用いられた。有能な子どもに対する教師の価値観や教育的記録の重要性など、レッジョの教育プロセスにおける多くの側面を示しているこの写真は、巡回展“The Hundred Languages of Children”にて紹介された(Millikan, 2009)ほか、“*The hundred Languages of Children: The Reggio Emilia Approach—Advanced Reflection, The Second Edition*” (Edwards, Gandini & Forman, 1998)や、Young childrenのMalaguzzi (1993)の記事などの出版物にも引用されている。この写真は、言葉無しにそこで行われている保育者と子どもの対話が特に注目され(秋田, 2018など)、保育者が子どもに聴き入ることにより子どもが仮説や理論を検証しようと思える姿が人々を魅了してきた(大宮, 2007; 橋川, 2022)⁵。しかしこのエピソードに関しては、写真に映った保育者と乳児の1対1のコミュニケーションに焦点が当てられていることが多く、家庭とは異なる保育施設における保育生活という場の特性を含み入れた視点からの考察は管見の限り無い。また、特に日本においては、ラウラの腕時計のエピソードのみが有名だが、これはラウラの乳児保育所での保育生活のはじまりにおいて、どのような意味を持つものだったのだろうか。

3 結果と考察

本節では以下の通りに結果と考察を述べる。第1に、「ラウラの日記」の記録としての特質を確認する(3.1「ラウラの日記」の特殊性)。第2に、収録された各エピソードにおいて捉えられているラウラの関係性に着目した結果を述べる(3.2 10日間のエピソードにおけるラウラの関係性)。第3、第4に、具体的なエピソードから、乳児が保育施設に適応していく過程における、家族の存在と保育者のかかわりについてそれぞれ検討する(3.3 乳児の適応過程における家族・3.4 乳児の適応過程における保育者)。第5に、「腕時計のチクタク」のエピソードについて、ラウラの生活全体を見たときにどのように捉えられるのかについて考察する(3.5 ラウラの保育生活のはじまりにおける「腕時計のチクタク」)。

3.1 「ラウラの日記」の特殊性

「ラウラの日記」は何をどのように捉えたものだったのだろうか。本節では、「ラウラの日記」本編に含まれる内容を整理する。イタリア語で書かれた「ラウラの日記」本編は、表紙と裏表紙を含めて計17ページである。その文章の構成と各ページに掲載されていた写真の概要は表1の通りである。

表1 「ラウラの日記」本編の文章の構成と写真

p.	日記の構成		写真
	タイトル (英語訳)	タイトル (日本語訳・筆者作成)	
1 表紙	The Diary at the infant-toddler center to record stories of children: Story of Laura	子どもたちの物語を書き留める乳児保育所の日記：ラウラの物語	ラウラが保育者に駆け寄る写真、ラウラが絵の具の付いた筆を手にとる写真
2	The diary as a working tool	ツールとしての日記	3人の子どもがテーブルに着席している写真（ラウラが身を乗り出してる）
3 Introduction	・ For whom is the diary created?	・ 誰のための日記か	3人の子どもがおもちゃを前に遊んでいる写真
4			ラウラが絵の具の入った瓶をのぞいている写真
5 Story of Laura	・ Who is Laura?	・ ラウラとは誰か	保育室で何かを指さし会話をしている保育者2人の写真
6	・ What is the diary?	・ 日記とは何か	同じかご（玩具の入ったかご）を覗く2人の子どもの写真
7 9月4日	Help from the mobiles	モビールからの助け	ラウラが泣きそうな顔で保育者を見つめる写真、保育者が泣いているラウラを抱きモビールのそばにいた写真、モビールを手で揺らすラウラの写真
8 9月7日	Difficulties during diaper change	おむつ替えにおける困難	保育者がおむつ交換台にラウラを寝かせようとする2枚の写真（ラウラの表情と身体のコわばりが異なる）、おむつ交換台に背中をつけリラックスした様子で保育者のめがねを触るラウラの写真
9 9月17日	The first kiss to daddy	お父さんへのはじめてのキス	保育者と父親とラウラが映った写真、保育者に抱かれ父親と手をふり合うラウラの写真、保育者の腕に抱かれながら父親の頬にキスをするラウラの写真
10 9月29日	The contested doll	争われた人形	ラウラとシルビアが人形を取り合う出来事の一連の流れを示す5枚の写真
11 9月30日	The first imitation game	初めての見立て遊び	人形を抱き、そばに落ちていたスプーンでごはんを食べさせるような仕草をするラウラの見立て遊びの一連の流れを示す5枚の写真
12 10月2日	The apple in the kitchen	キッチンのりんご	保育者に支えられながら窓ガラスに両手をつけて立ちキッチンを見つめるラウラとジョルジオの写真、キッチンで働く女性が3人のそばにやってきて話をしている写真、カウンターの上に座るラウラとジョルジオにキッチンで働く女性がりんごのスライスを差し出している写真
13 10月9日	Laura and the mirror	ラウラと鏡	鏡に映った自分とラウラの間で起きた出来事の一連の流れを示す4枚の写真
14 10月12日	Discovering the drawer	引き出しの発見	引き出しとその中に入っていた長い紙とラウラの間で起きた出来事の一連の流れを示す7枚の写真
15 10月13日	On board the big stroller	大きなカートに乗って	子どもたちが順にカートに乗せられている写真、カートに乗った子どもたちに保育者が話をしている写真、保育者がカートを押している写真、カートの中で笑顔を見せるラウラの写真、キッチンで働くウィルマが子どもたちを抱き上げてカートから降ろす場面の写真
16 10月21日	The watch's tick-tock	腕時計のチクタク	保育者と時計のカタログとラウラの間で起こった出来事の一連の流れを示す6枚の写真
17 裏表紙			無し

日ごとの具体的なエピソードが始まる前には、導入として、日記という記録形態やラウラの基本的な情報について記されていた。特に「ツールとしての日記」では、内省的で文学的な日記と、客観的に出来事を記す日記が存在することを述べながら、乳児保育所の日記はそのどちらとも大きく異なることが明記されている。乳児保育所の日記における文章は「子どもというよりも、子どもと教育者、子どもと子どもたち、子どもと物や空間の間で起こる出来事を捉えようとしている」(p.25)と記されている。そして、そこで記されることは「それらの関係性の中で生じたダイナミクス」(p.25)にあり、子どもや大人個人に属するものではないことが述べられている。

次に、記録の方法に着目する。特徴的なのは、「使用されるコードは文字だけでなく、写真、またはその両方の混合物である」(p.25)と書かれているように、写真に文字と同程度の価値を認めて用いることが示されている点である。日記の中で用いられる写真は、空いた隙間を埋めるための挿絵ではなく、文章と同程度に情報を含んで記録するための手段の一つなのである。このような記録の特性は、言語的言葉を多く持たない代わりに細かな動作や表情などあらゆる表現を用いる乳児のこぼれを掬い上げる上で効果的だと考えられる。

実際に写真に着目してみると、子どもの表情や行為のみを捉えた写真だけでなく、状況や場所の様子も含めて撮影されていることが多い。例えば、ラウラの情報が載ったページには、子どものいない保育室で保育者らが何かを指さし立ち話をする様子が引きで撮られた写真が載っている。他の写真はラウラ本人を含む写真となっているが、例えば本人の笑顔が大きく映ったようなものなど子ども個人のみ焦点が当てられたものは無く、どれも保育者、他の子ども、筆や玩具などの物など、多様なものと共にあるラウラの姿を捉えている。この日記は、「関係性の伝記であり、より正確には、より多くの関係性の伝記である」(p.9)とRinaldiが述べるように、単に保育者が子どもとの相互作用を通して捉えた個人の成長だけを追って記録したものではなく、乳児保育所においてラウラが出会っているあらゆる関係性を捉えたものであることがわかる。

3.2 10日間のエピソードにおけるラウラの関係性

次に、出来事を中心に記録された10日間のエピソードは、ラウラの他に何に着目して記述されているのかを検討する。各エピソードの記述において登場した物や人を表2にまとめた。

表2 ラウラの10日間の日記に登場する物や人

日付	タイトル (英語訳)	登場する物や人						
9月4日	Help from the mobiles	母親	祖母	赤いカーペット	カラフルなボールが付いたモビールの動き・音	楽器の音	他児 (Alessandro, Agnese)	保育者
9月7日	Difficulties during diaper change	おむつ交換台	保育者	濡れたおむつ	おもちゃ	濡れたクロス	交換台のふち	保育者のめがね
9月17日	The first kiss to daddy	父親	ジャケットと帽子	保育者				
9月29日	The contested doll	カーペット	他児 (Silvia)	柔らかい人形	保育者	人形の目、鼻、髪		
9月30日	The first imitation game	母親	ぬいぐるみ	人形	人形の鼻	スプーン	金属製の宝物のかご	
10月2日	The apple in the kitchen	母親	大きなガラス扉	他児 (Giorgio)	料理人 (Wilma, Marisa)	キッチン音	カウンター	りんごのスライス
10月9日	Laura and the mirror	カーペット	鏡	小さな木の物	宝物のかご	母親		
10月12日	Discovering the drawer	机	引き出し	粘着ラベル付きの長い紙	他の引き出し			
10月13日	On board the big stroller	大きなカート	他児たち	周辺の路地	カートのふちや枕	ガラス	他クラスの保育者 (Cinzia) や子ども	料理人 (Wilma)
10月21日	The watch's tick-tock	テーブル	他児たち	カタログ	男性と女性の写真	母親・父親	時計の写真	保育者 保育者の腕時計

表2から、ラウラの日記は、例えば決められたテーマに従い収集されたエピソード群なのではなく、多岐にわたる物や人との関わりが記録されていることがわかる。その中でも特に、モビールや鏡や引き出しなど、物との関わりが強調されたエピソードが複数あり、日記が着目する関係性は、人との関係性に限らないものである。例えば、9月4日のエピソードはラウラが初めて乳児保育所にやってきた記念すべき日の出来事であるが、タイトルは「モビールからの助け」(Help from the mobiles)となっており、モビールという物が行為主体として扱われている。このエピソードでは、母親と祖母が部屋を離れたことに気づきラウラが泣き出した時、保育者はラウラを抱き上げて、モビールという「気晴らし (distraction)」を使ってこの「危機 (crisis)」を乗り越えようとした。「さっきまで私たちが遊んでいたモビールに手を伸ばす。私はそれを動かし、ラウラに見せ、触らせた。彼女にとってまだ新しいその音を聴かせ、ラウラが少しずつリラックスし、(モビールの)カラフルなボールに微笑み始め、その動きに合わせて目の前にボールを投げるようになるまで続けた」(p.33)。Edwards (2009b)は『ラウラの日記』の最終考察の中で、果たしてこの保育者の関わりは彼女が呼ぶように「気晴らし」であったのか、それとも別の何かだったのか、と問っている。この出来事における人の相互作用に焦点を当てると、馴染み深い母親や祖母がいなくなって不安を感じているラウラに対して、彼女の気をなんとか逸らし、母親らが戻ってくるまで、もしくは彼女がそのことを忘れるまで、保育者がその場をやり過ごそうとした様子と考えられる。しかし、表2に表れているように、ラウラは、保育室という真新しい空間で保育者や他児など新しい人々と出会うと同時に、柔らかいカーペットや初めて見るモビールや楽器、初めて聴くそれらの音など、あらゆる物とも出会っている。その中でもモビールは、そのカラフルな見た目と音により、ラウラを特に惹きつけた。人間関係以外のラウラの関係性にも意識を向けると、このエピソードは、ラウラが保育室内のあらゆるものとの関係性を築き始めた場面の記録として見えてくる。物であるモビールの持つ力に焦点を当てたタイトルのエピソードは、ラウラの乳児保育所への参加を、人だけでなくあらゆる物を含んだ関係性の世界への参加としてみる可能性があるを拓いている。

10月12日の「引き出しの発見」(Discovering the drawer)というエピソードでは、数日前に歩き始めたラウラが、立ち姿勢で机と出会い、その引き出しを探究する様子が記されている。ラウラは、机の引き出しに入っていた長い紙を引っ張り出し、引き出しの中身を「空っぽにする」遊びに興味を持ち、それを繰り返そうとする。しかし、次に覗いた引き出しはすでに空っぽで、困惑して再び覗いた後、がっかりした様子で去っていく。オーストラリアの研究者Millikan (2009)は、こうした引き出しや鏡をめぐるエピソードについて、ラウラが可能性を探究し実験していることに着目している。「境界線は何か？何が可能か？何が許されるのか？このような幼い時期には、その環境における新しい人、環境、物、そして出来事への移行は果てしないように思われる。新しい冒険が提供されるにつれて、それぞれの経験は大切な他者への信頼を生む」(Millikan, 2009, p.93)。ハイハイから立ち姿勢になったことによりラウラから見える景色が変わり、同じ環境においてこれまでとは違う出会いが生じる。このように場所の探究を繰り返す新しいものと出会っていくことによって、その場所が次第に馴染み、安心できる居場所になる。このエピソードは、歩行を始めたことで探索の範囲が変化し、乳児保育所の空間におけるラウラの関係性が広がっていく様子を示している。このエピソードを記録した保育者は、乳児保育所に慣れていくラウラの姿について、歩き始めたというラウラ個人の発達的变化自体ではなく、そのことによって広がっていくラウラの探究に着目して捉えている点が特徴的である。

3.3 乳児の適応過程における家族

表2に示されている通り、10日間のエピソードのうち6日分に母親もしくは父親が出来事に参与している、または保育者が彼らに言及した文章があった。本節では、ラウラの保育生活のはじまりにおいて、家族の存在がどのように位置づいているかを検討する。

9月17日の「お父さんへの初めてのキス」(The first kiss to daddy)では、いつもの母親とは異なり父親と一緒にラウラが登園した日の朝の様子が描かれている。これは、乳児保育所への登園を肯定的に捉え始めたラウラが落ち着いて父親と別れることができたという何気ない朝の一コマで、家庭から乳児保育所への移行の瞬間を記したものである。保育者がラウラの乳児保育所での様子を説明したり、父親が昼食やお昼寝、また他児との関係などを質問したりする会話が大人たちの間で飛び交う中で、ラウラは父親から保育者の腕の中へと手渡される。

Millikan (2009)によると、そのような家族と保育者の関係性の形成には、日記からも伝わる温かい雰囲気によって生み出される所属感が深く関係している。このエピソードでは、保育者と家族の穏やかな会話に支えられるようにして、ラウラの日々の保育生活が始始することが示されている。

9月30日の「初めての見立て遊び」(The first imitation game)では、家族と保育者のやりとりがエピソードの記述の中に登場する。前日に人形をめぐって生じた他児との言い争いの出来事を保育者が母親に話すと、母親は、最近家ではぬいぐるみで遊び、それを抱きしめて寝ていることを話した。それを聞いていたからこそ、乳児保育所でもラウラが人形を抱きしめ大事そうに子守唄を歌う姿を見て、保育者は嬉しくなったのだと記されている。ラウラはその後、スプーンを拾って人形に食べさせるふりをする。レッジョでは直線的で段階的な発達といった概念を批判的に捉え、学びや知識がどのように構成されるのかに焦点を当てる (Malaguzzi, 1998)。このエピソードは見立て遊びをするようになったという生後11ヶ月のラウラの適切な発達を示すものでもある。しかし保育者は、何よりもまず、家庭と連続した生活におけるラウラの「嬉しそうな様子 (happy attitude)」(p.41)に着目してこれを記録している。

これらのエピソードから、家族の存在がラウラの乳児保育所での生活のはじまりにおいて重要なものとして位置づいていることが見えてくる。スコットランドの研究者Wharton (2009)は、「ラウラの日記」に家庭での遊びと乳児保育所での遊びの両方が子どもの生活全体のストーリーとして組み込まれており、両方の文脈においてラウラの成長を捉えている点に着目している。「ラウラの日記」における保育者は、家族との情報交換を密にしているとともに、家庭でのラウラの様子と乳児保育所でのラウラの経験の連続性を意識していることが読み取れる。Rinaldi (2006/2019)によると、レッジョでは、親と保育者が答えではなく過程について話し合い、子どもという存在について共に学ぶことを重視する。乳児保育所に通う子どもは家族から切り離されて新しい場所で生活をするのではなく、家庭と乳児保育所を行き来する中で、家族と乳児保育所が共に乳児の生活をつくっていくのである。家族は、子どもを捉える上で欠かせない要素 (Malaguzzi, 1993)としてラウラの日記においても表れており、乳児の保育生活が繰り返されていくにつれて、日々の温かい雰囲気の中で培われていく所属感とともに家族と乳児保育所の関係性が深まっていくことが示唆される。

3.4 乳児の適応過程における保育者

アメリカの研究者Lally (2009)は、レッジョにてアメリカからの訪問者がcaregiver (世話人)とprovider (提供者)という言葉を使用した際に、ペダゴジスタがはっきりと「ここでは、ただ誰かの世話をする人や、マニュアルに従ってサービスを提供するだけの人はいない」と述べたことを記録している (p.67)。本節では、知識と文化の共同構築者 (Dahlberg et al., 2013/2022)である保育者が、乳児の保育生活のはじまりにどのように関わっているかを検討する。

それぞれのエピソードを記録している保育者は、無機質な透明な壁となって子どもを遠くから観察しているのではなく、時には迷い感情も揺れ動かされながら身近でラウラと関わる存在として、エピソードの中にも登場している。日記の冒頭「ツールとしての日記：誰のために日記は作成されるのか？」においてRinaldiは、日記を作ることに子どもにとって利点は、「周囲の環境とのコミュニケーション、注意力、感受性を高め、“subject of love” (愛の対象/主体)となることで気づきを得る」(p.27)ことであると述べる。保育者は「愛」を持って子どもをまなざしているのである。スウェーデンの研究者Göthson (2009)は、ラウラの物語が、視覚的に表現された応答的な見方を提示することによって、ラウラや子どもたちに「人類への贈り物となる感覚」を与えていることに着目し、これを「歓迎の物語」(p.107)と捉える。「ラウラの日記」にある歓迎的で暖かな雰囲気は、他の研究者にも指摘されている。Lally (2009)は、「子どもたちの仮説を特別なものとして扱い、子どもが毎日を楽しく経験できるように愛情豊かで知的に豊かな環境を作ること」(p.73)を当然のように考える保育者の関わりは、ただ子どもの安全を守っているのでも、生産的な大人へ子どもを準備させるのでもなく、子どもに対する深い思いやりによるものだと捉え、それは保育者が主観的に関わっているからこそ生まれるのだと述べる。

主観的に関わる保育者の様子は、エピソードの随所に表れている。ラウラが乳児保育所での生活を始めてから数日後「おむつ替えにおける困難」(Difficulties during the diaper change)では、おむつ替えという生活のワンシーンにおけるラウラと保育者のやりとりが記録されている。エピソードはこのような文章から始まる。「今

日も、おむつ交換の瞬間に若干の困難があった。私は、何度も何度も試して、あまり動揺させないように気をつけた。私がラウラをおむつ交換台に寝かせようとする、昨日と同じように彼女は硬直してしまう。私は彼女を抱き上げ、落ち着かせ、もう一度やってみるが、また硬直し、泣き出しそうになったので、私は彼女を抱き上げ、部屋へ戻った。」(p.34-35) これは、おむつを替えるために台の上にラウラを寝かせたいのだが、彼女がそれを拒むように身体を強ばらせるためにうまくいかないという場面である。乳児にとっておむつ替えは、家族でも保育施設でも共通して行われる基本的な生活習慣の一部である。Millikan (2009) は、ここで、慣れていない大人との信頼を育むと同時に、慣れ親しんだ生活の一部について新しい手順を受け入れるという、二つの移行がラウラにとって生じていることを指摘する。このエピソードは、乳児のリズムや反応に時間をかけて調子を合わせる保育者の様子を示している。複数回に渡る試行において保育者と触れ合う経験を繰り返すうちに、次第にラウラの身体がほぐれていく様子が、文章と3枚の写真により表現されている。保育者は、おむつ交換台とラウラの対話を敏感に聴き取りながらかかわっていた。韓国の研究者Oh (2009) は、ルーティンが子どもが一方的に受け入れ適応するのではなく、保育者やラウラが互いに調整し影響を与え合い歩み寄っていることに着目する。保育者は、乳児が保育生活に慣れていく上で、主観的に関わり、環境との関係性の中で共に変化するプロセスを大事にしていると考えられる。

3.5 ラウラの保育生活のはじまりにおける「腕時計のチクタク」

最後に、有名な「腕時計のチクタク (The Watch's Tick-Tock)」について、ラウラの保育生活のはじまりにおける意味を考察する。これは「ラウラの日記」の最後に記録された10月21日の日記である。「腕時計のチクタク」は写真と共に以下の文章によって綴られている。

食後のテーブルで、みんなとても幸せそうにしている。子どもたちは互いに遊び、「おしゃべり」をしている。この静けさを利用して、私はラウラに画像がたくさん載った大きなカタログを差し出し、それをめくるように勧めた。それをしている間、彼女はとても集中して、画像から目を離さず、興味深そうに見ている。ページをめくるときの彼女の動きは、とても丁寧で洗練されている。

彼女がとても集中しているので、私は邪魔にならないよう介入しない。私は彼女をじっと見ていた。彼女は男女の写真を指差し、静かに“mommy”や“daddy”という言葉をつぶやく。

並んでいる腕時計の前で、彼女は私を見る。私は近づいて、彼女と一緒にそれを眺めた。私は「腕時計だよ」と伝えて、私の手首の腕時計を見せる。そしてチクタクという音が聞こえるように、彼女の耳にそれを近づける。彼女はそれを長い時間集中して聴き、そして、耳を離し、頭を上げ、画像に戻り、再びそれを見つめ、そして自信をもって、ページの横に耳を置く。(pp.50-51)

冒頭の文章からわかるように、ラウラの腕時計のエピソードは、保育者とラウラが二人きりでいるのではなく、食後に他の子どもたちが「おしゃべり」し合っているようなあたたかい雰囲気の中で起きた出来事だった。さらに、これは自発的にカタログを手にとったラウラに保育者が寄り添ったのではなく、保育者がその場の「静けさ (tranquility) を利用して」カタログをラウラに差し出した場面だった。ここでの静けさとは、音が無いという意味の静けさではなく、落ち着いてゆったりとした時間がそこに流れていたことを示している。ラウラはカタログを指して“mommy”や“daddy”と言い、そこに写った男女の姿を自分の両親と繋げる。このように、よく知られた腕時計をめぐる探究においては、保育室内の子どもたちとの落ち着いた生活の雰囲気や、写真から連想された母親と父親などが、ラウラのそばにあったことがわかる。写真のみに着目すると、ラウラが腕時計と保育者との濃厚な三項関係の中で理論を構築している様子が見えるが、文章も含め改めて読み解くと、他児や家族などを含む多くの関係性の中にあるラウラの姿が見えてくる。我々は、全体的な理解よりも切り刻んだ世界の理解 (Vecchi, 2004) をしがちである。腕時計のエピソードについて写真だけを用いて議論を続けると、保育者のみがラウラの関わり相手として強調され、まるでそれが子どもから狙った行動を引き出す模範的な関わりのようにも捉えられてしまい、Malaguzziが批判する「不確実性を持たない予言的な教育学」(Cagliari et al., 2016, pp.421-422) へと転がりかねない危険性もある。

Oh (2009) は、腕時計のエピソードの持つ強力なメッセージ性を認めた上で、このエピソードだけに着目することについても、「出来事や参加者を時間の流れや周囲の環境から切り離せるかのように断片化して見てしまう」という問題点を指摘し、「ラウラの日記全体を見ることで、学びと発達、長く、広く、確立された人間関係の文脈と歴史の中で起こることに気付ける」(p.101) ことを示唆している。Edwards (2009b) は、なぜラウラの新しい環境への適応の物語の最後がこのエピソードで締めくくられているのかという問いを読者に投げかける。Oh (2009) は、「小さな普遍的な日常のエピソードたちが、「腕時計のチクタク」のような壮大な仮説検証への道を開いた」(p.103) と述べる。学びを生み出すレッジョの「ことば」とは、慣習的な話し言葉だけでなく、考察したり、深く掘り下げたり、質問したり、解釈したりするような、あらゆるコミュニケーション方法を意味する (Vecchi, 2010)。日記に示されていたあらゆる物や人や空間との関係性の構築を経て、より明示的に自ら関係性を結ぶ様子が表現された「腕時計のチクタク」でのラウラは、「ことば」によって学びを生み出している姿として考えられる。ラウラの物語の最後にこのエピソードが据えられたことによって、保育生活のはじまりにおける多くの出会いが、学びの生成へつながっていることが見えてくる。

4 総合考察

本研究では『ラウラの日記』を分析し、レッジョの乳児保育所での乳児の保育生活のはじまりについて検討した。その結果、以下が明らかになった。第1に、「ラウラの日記」は人や物や空間の間で生じる出来事を文章と写真によって捉えたものだった。第2に、ラウラの保育生活のはじまりの日々は、人だけでなくあらゆる物を含む関係性の世界への参加だったことがわかった。第3に、乳児保育所への適応は、家族と保育者の密なコミュニケーションとそれにより育まれる所属感の中で行われていた。第4に、“subject of love”としての乳児に主観的に関わる保育者は、周囲と乳児の対話を丁寧に聴き、互いを知り合い、共に保育生活のはじまりをつくっていた。

そして、聴き入る保育者と乳児の仮説生成の事例として紹介されることが多い「腕時計のチクタク」のエピソードは、ラウラが乳児保育所で積み重ねた関係性の歴史の中にあるものとして見えてきた。Göthson (2009) は、レッジョの保育実践について一般的な解釈では子どもの力だけが強調されており、その問題点として、人間関係や集団の意味を見逃すことを指摘している。ラウラの乳児保育所への適応は、家庭とは異なる環境であらゆる物や人との関係性を築き、それらに支えられながら自ら新しい関係性を生み出していく過程として考えられた。そして、それは「ことば」(Vecchi, 2010) による学びの生成へつながるものとして捉えられた。

そのような乳児の保育生活は、保育施設の中だけで完結する切り離された生活なのではなく、家庭での生活と絡み合い、互いに影響を与えながら、ともに進んでいくものであることが示唆された。家族とは一様なものではなく、その体験は状況においても変化する。Rinaldi (2006/2019) は、今の時代において親となることの意味の解明の必要性を述べる。現在のレッジョでも、教育プロジェクトにおける家族の経験とその参加は探究され続けている (Castagnetti, 2023)。

本研究では、レッジョの乳児保育実践に関する記録から、乳児にとっての保育生活のはじまりが、家族と保育者に支えられたあらゆる関係性の中で、学びが生成されていく様子として考えられることが明らかになった。これは、乳児の保育生活が、単に子どもを預かり家庭の代わりにケアを行う場ではなく、関係性による学びが発生する教育的な場となり得ることを示唆している。また本研究は、これまで日本では3歳以上児の保育について議論されることが多かったレッジョの保育実践について、乳児の保育生活においても同じ教育哲学のもと、家庭とは異なる関係性と学びが存在することを改めて示した。この視点を参考に、日本の文脈における乳児の保育生活の実態を捉えることを今後の課題としたい。

【註】

- 1 本論文では、2009年に出版された『ラウラの日記：レッジョ・エミリアの日記への視点』を『ラウラの日記』、その中のPART 2に収録された日記本編(1983年にイタリア語で出版されたもの)を「ラウラの日記」と記す。なお、『ラウラの日記』においては、PART 1にRinaldiによる序文、PART 3に大人になったラウラと彼女の家族との再会について、PART 4に各国の研究者によるラウラの日記につ

いての論考が掲載されている。

- 2 評議員 (Assessore) とは、市・州・地域などを統括する地方自治体機関のメンバーのことであり、教育などの特定の部門や政策分野を担当する (Reggio Children, 2012)。
- 3 Rinaldi (2006/2019) において里見は “il Gruppo Nazionale Nidi” を「全国保育者連盟」、 “il Gruppo Nazionale Nidi Infanzia” を「全国幼稚園・保育園教職員連合」と訳しているが、本研究ではこれが乳児保育所 (Nidi) に関する実践と経験の交流を目指したものであったことを重視し、訳を再検討した。
- 4 adjust/adjustment という単語は主に編者の一人である Edwards の執筆箇所に頻繁に登場する。本論文では、これを「適応」と訳すが、子どもや乳児保育所が互いに「調節」し合うという意味も含まれていると考える。
- 5 ラウラの話はルチアという名前で語られていることもある。また、「ラウラの日記」に記された誕生日からして当時ラウラは1歳0ヶ月であるが、日本では月齢が勘違いされたまま広まっており、驚くべき10ヶ月児として紹介されていることが多い。

【参考文献一覧】

- 秋田喜代美 (2018) なぜ、いまあらためてレッジョ・エミリアか, 発達156, 2-7.
- 浅井幸子 (2020) 保育の新たな物語りへ——公教育としての保育, 発達162, 2-7.
- Cagliari, P., Castagnetti, M., Giudici, C., Rinaldi, C., Vecchi, V., & Moss, P. (eds) (2016) *Loris Malaguzzi and the School of Reggio Emilia: A selection of his writing and speeches, 1945-1993*. London: Routledge.
- Campani, G., Cavazzoni, P., Forghieri, E., & Bini, T. (2009) 'An Encounter with Laura', in C. Edwards & C. Rinaldi (eds) *The Diary of Laura: Perspectives on a Reggio Emilia Diary*. MN: Redleaf Press, 57-64.
- Castagnetti, M. (2023) レッジョ・エミリア・アプローチの視点より『参加』の考え方～家族やコミュニティの参加をどのようにデザインするか～. JIREA・東京大学大学院教育学研究科附属発達保育実践政策学センター共催, 東京大学, 2023/5/25.
- Dahlberg, G., Moss, P., & Pence, A. (2013) *Beyond Quality in Early Childhood Education and Care: Language of Evaluation 3ed*. London: Routledge. 浅井幸子 (監訳) (2022) 『「保育の質」を超えて—「評価」のオルタナティブを探る—』ミネルヴァ書房.
- Edwards, C., Gandini, L., & Forman, G., (1998) *The Hundred Language of Children: The Reggio Emilia Approach—Advanced Reflections, 2nd ed*. Ablex Publishing Corporation. 佐藤学・森真理・塚田美紀 (訳) 『子どもたちの100の言葉——レッジョ・エミリアの幼児教育』世織書房.
- Edwards, C. (2009a) 'Introduction: Setting the Scene', in C. Edwards & C. Rinaldi (eds) *The Diary of Laura: Perspectives on a Reggio Emilia Diary*. MN: Redleaf Press, 1-6.
- Edwards, C. (2009b) 'Final Reflections: The Diary of Laura as a Tool for Professional Development', in C. Edwards & C. Rinaldi (eds) *The Diary of Laura: Perspectives on a Reggio Emilia Diary*. MN: Redleaf Press, 123-137.
- Göthson, H. (2009) "'Tell Laura I Love Her, Tell Laura I Need Her': A Swedish Song", in C. Edwards & C. Rinaldi (eds) *The Diary of Laura: Perspectives on a Reggio Emilia Diary*. MN: Redleaf Press, 107-122.
- 橋川喜美代 (2022) 保育実践の質向上とドキュメンテーション—レッジョの「聴き入ること」の教育をてがかりに—. 関西福祉科学大学紀要, 26, 31-42.
- 上村香織 (2018) レッジョ・エミリア市在住の保護者の視点からみた“レッジョ・エミリア”. 発達156, 73-78.
- 小玉亮子 (2020) さまざまな歴史とさまざまな街—世界の幼児教育におけるレッジョ・インスピレーションの(不)可能性. 発達162, 30-35.
- 厚生労働省 (2022) 保育所等関連状況取りまとめ. <https://www.mhlw.go.jp/content/11922000/000979606.pdf> (2023/8/22アクセス).
- Lally, J. R. (2009) 'How the Infant Teacher's Context Influences the Content of Diaries', in C. Edwards & C. Rinaldi (eds) *The Diary of Laura: Perspectives on a Reggio Emilia Diary*. MN: Redleaf Press, 67-75.
- Millikan, J. (2009) 'Laura's Diary: An Australian Perspectives', in C. Edwards & C. Rinaldi (eds) *The Diary of Laura: Perspectives on a Reggio Emilia Diary*. MN: Redleaf Press, 85-95.
- 森真理 (2020) コロナ禍におけるイタリアのレッジョの乳幼児教育が示唆すること～参加・対話・連帯に着目して～. 神戸親和女子大学国際教育研究センター紀要, 6, 1-10.
- Moss, P. (2019a) *Alternative Narratives in Early Childhood: An Introduction for Students and Practitioners*. London: Routledge.
- Moss, P. (2019b) ローカルな文化的プロジェクトの国際的な重要性、またはレッジョ・エミリアが乳幼児教育に与えるインパクトについて. Peter Moss & 佐藤学スペシャルトーク「レッジョ・インパクトを再考する」お茶の水女子大学, 2019/12/3
- Malaguzzi, L. (1993) For an education based on relationships, *Yong Children*, 49(1), 9-13.
- Malaguzzi, L. (1998) 'History, Ideas, and Basic Philosophy: An Interview with Lella Gandini' in Edwards, C., Gandini, L., & Forman, G., (1998) *The Hundred Language of Children: The Reggio Emilia Approach—Advanced Reflections, 2nd ed*. Ablex Publishing Corporation, 49-97.
- Oh, M. (2009) 'Contextualizing the Watch Episode of Laura: Its Significance to Korean Educators' in C. Edwards & C. Rinaldi (eds) *The*

- Diary of Laura: Perspectives on a Reggio Emilia Diary*. MN: Redleaf Press, 97-106.
- 大宮勇雄 (2007) レッジョ・エミリアやニュージーランドの保育者には子どもがどのように見えているのだろうか, *現代と保育*, 69, 6-53.
- 大塚裕子・桑田幸生 (2020) ドキュメンテーションとリフレクションにもとづく保育実践のデザイン, *認知科学*, 27(2), 163-175.
- Reggio Children (2012) *One City, Many Children: Reggio Emilia, A History of the Present*. Reggio Emilia: Reggio Children.
- Rinaldi, C. (2006) *In Dialogue with Reggio Emilia: Listening, researching and Learning*. London: Routledge. 里見実 (訳) (2019) 『レッジョ・エミリアと対話しながら：知の紡ぎ手たちの町と学校』 ミネルヴァ書房.
- 佐藤学 (2020) レッジョ・エミリアの教育とピーター・モス教授に学ぶ教育学の新しい物語り, *発達*162, 21-25.
- Singer, E. (1993) Shared Care for Children, *Theory & Psychology*, 3(4), 429-449.
- Smith, C. (1998) 'Children With "Special Rights" in the Preprimary School and Infant-Toddler Centers of Reggio Emilia' in Edwards, C., Gandini, L., & Forman, G., (1998) *The Hundred Language of Children: The Reggio Emilia Approach—Advanced Reflections, 2nd ed.* Ablex Publishing Corporation, 199-214.
- Vecchi, V. (2004) The multiple fonts of knowledge, *Children in Europe*, 4, 18-21.
- Vecchi, V. (2010) *Art and Creativity in Reggio Emilia: Exploring the role and potential of ateliers in early childhood education*. London: Routledge.
- Wharton, P. (2009) 'In the Footsteps of Laura's Teachers: A Scottish Perspective' in C. Edwards & C. Rinaldi (eds) *The Diary of Laura: Perspectives on a Reggio Emilia Diary*. MN: Redleaf Press, 77-84.

